
チート国家、異世界へ

ファイナルトム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート国家、異世界へ

【Nコード】

N2065Y

【作者名】

ファイナルトム

【あらすじ】

日本が無く別の国家が存在していた世界・・・チート国家とよばれた国が他の世界へトリップしてしまう。

トリップの日(前書き)

国家クラスのトリップに挑戦してみました。

トリップの日

この世界はちよつと違った世界・・・寿命の概念が無く、世界共通語のみで日本という国がない世界。

本来日本がある位置にユリシースという大陸と民主主義国家があった

地震予知センター

「お定番だね。」

「はい！？お定番？」

「独り言、独り言・・・というか・・・」

「おつと地震予測が出来たぞ。久しぶりの地震だな・・・」

「会いたかつたにしか聞こえないぞ？」

「会いたくないさ！まあ・・・1ヶ月ぶりだけど。」

「なんじゃこりゃ！？首都直下型だぜ！」

「詳細な情報は不明！」

首都直下型地震・・・最も恐れられている地震である。発生した場合、首都崩壊もありえ、準備が盛んに勧められているも予測している時期より10年早かった。

「来るぞ！」

だが、いまいち弱い地震で済んだのであった。

それだけだった、筈であった・・・

国会議事堂のとある一室

「とりあえず、明日の休暇を使って涼宮ハルヒの憂鬱をまとめて買

つてから雪風の最終巻を買っよ。」

そういうのはユリシーズ国を代表する・・・総理大臣こと東郷和馬である。当選後、早々に何故か総理大臣となったが腕は確か・・・なはず。

「首相！いい加減、公務中のプライベートな会話はお控えください！」

「いいではないか。ただでさえ、激務なのに！」

怒るのは総理の秘書・・・ミント・スタージユである。東郷総理にはちよつとした恋心を抱いているも、アニメ・ゲーム好きの総理に呆れているばかり。みんと本人もアニメ・ゲーム好きであるが、隠し趣味・・・ミスNo.1もびつくりな美貌を持ち、金髪かつスタイル抜群の美人秘書である。

「東郷総理！緊急事態です！」

「どうした！？」

慌てて電話を切る。

「地震の被害状況ですが・・・」

「今のは震度2くらいだろ？被害はそんなにないだろう・・・」

「(こいつ・・・)」

「全衛星からの通信途絶、海外へのネットワーク接続不可・・・」

「・・・ジョーク？」

「・・・いいえ。」

「後、竹島の韓国人に脅しに行ったアーレイバーク級ミサイル駆逐艦『フレアボム』からですが、竹島が目の前から消えたとの事です。」

「

「超次元だな・・・」

「おかしなことにグリーンランド戦争へアメリカ軍の援軍として派遣した筈のあたご型護衛艦がここから200海里先にて航行しているとのこと・・・」

「ワープだよな？ここはアニメかゲームの世界か！？というか入り込んだ！？」

「まだ確証は・・・現在、ユリシーズ大陸全土が無事なのは確認しました。ただ沖縄が・・・四国の真下に・・・」

「地質学は俺の専攻ではないし、高卒だ！大学の問題はからまんでくれ！」

「専門家を全国一斉招集したいのですが、マスコミの野郎どもにも有名人をとられまして・・・しばらくはかかりそうです。」

「マスゴミ風情が！」

首相官邸で混乱している中、更に情報が入ってきた。

「ユリシーズ空軍司令官のカール・ジョンソン（略してCJ）です。」

「入りたまえ！」

「現在、日本周辺を空中給油機全機と・・・総理の趣味で量産したFFR-31MRからの偵察情報ですが、こちらが超高高度撮影によつて撮られた映像です。領空侵犯してありましたから冷や汗ものでしたよ・・・あちらさんなら良くやってましたが・・・」

「この場所って・・・」

「韓国の済州島がある地点です。昨日、更新された地図と比較しましたが、間違いありません。」

「緊急招集を掛ける必要があるな・・・ところでFFR-31MRはどうだ？」

「ええとですね・・・とりあえず、アニメと同じ性能にしろの成果は表れました。空軍パイロットからの評価は 5を付けても足りな

いくらいとのことですよ。」

「軍務大臣へ緊急連絡！FA-1、FFR-31 シルフィードの量産を命令！」

「始まったよ・・・（全く、FFR-31MRや61式戦車にF/A-27、拳銃にアドミラル56型までリクエストする無茶っぷり・・・それを実現するユリシーズ・エレクトロニクス社も凄いが・・・）」

ユリシーズ・エレクトロニクス・・・ユリシーズ国唯一の軍事会社。

宣言通りに緊急招集がかかり、全議員・全知事が出席した。

そこで最初の議論が現在のユリシーズ国の立場・・・それに加え周辺国家の消滅・・・衛星との通信消滅の原因の特定について26時間もの間続いていた。

この状況では流石に野党もヤジが飛ばせず、マスコミの首相叩きはなかったが、いまいち議論が進まずにいた。

それから数時間後、

皇居

ユリシーズ国の象徴たる存在である天皇のもとに東郷首相は赴いた。

「陛下、急用と聞き馳せ参じました。」

「東郷首相、今の状況からして・・・他の者は下がっていてくれ。」

スタッフを退けると突如、天皇は天皇らしくない態度をとったのであった。

「和馬、とりあえず状況を再度処理をしなければ何も始まらないぞ。」
「分かっているよ。とりあえず、光宏には老人どもを抑えてもらいたい。」

首相と天皇との関係・・・類は友を呼ぶと言われており、天皇も”オタク”である！自称”マニア”であるが・・・架空兵器実現化計画を承認したのはオタク魂が燃えたのもある。アドミラル56の進水式に24時間も前に一番乗りしたのは伝説である・・・

「とりあえず、スーパーシルフの偵察範囲を広げてみよう。空中給油機も1カ所に複数集中させてみよう。」

「とすると・・・パイロットを慎重に選ばないといけませんな。」
「確かに・・・前例の無い飛行時間になるかもしれない。いつも、バンシーでも造るか？」

「無理じゃないか？確かにエレクトロニクスに無理言ったが、常識的に考えてあんなでか物・・・今の技術では実現不可能だ。しかも・・・飛行石持つてこい！と無理難題言われるし・・・」
「異世界にあつたりしてな！」
「な訳あるか！」

話し合いの結果・・・周辺地域の偵察範囲を広げるだけに終わった。ユリシイズ国内ではピンチになりかけていると思いきや、大きな混乱が起きなかったが、同時に怪奇現象も複数発生している。

1、海外旅行や移住等、海外にいるユリシイズ人全員が日本の空港や港等の玄関口に出現した事。

2、様々な機械が突然、故障しなくなった。又、壊れた機会も復活

した。

3、大気中に新たな物質が確認された事。

4、Gがどのような機動や動きをしても掛からない事

他多数あった。テレビでの特集では随時検証が行われていたが、解決する事はなかった。

ユリシイズ国では一国のみでの生存が十分に可能である国の為、資源などの問題は生じなかった。石油もその他資源も各地域にて永久的の採取が可能であった。

トリップしてからの数日後である。

ユリシイズ軍威力偵察専門部隊ともいわれる第501偵察情報団（FFR-31MR専門部隊）より一つの知らせが首相官邸に飛び込んできた。

「西方に巨大な大陸を確認せり。ユーラシア大陸の倍はある・・・か。」

異世界人への接触

新たに発見された大陸はユーラシア大陸とほぼ同じ位置にあり、あの期待とある不安が横切っていたが、早速部隊に出発を命じた。

向かったのはユリシーズ陸軍第7歩兵小隊である。本来の部隊としての機能は対テロリスト専門部隊であるが、機動力が優れているということ選ばれた。編成人数は4名程・・・後方支援はユリシーズ海軍第5アルバロン艦隊のAH-64Dが待機しているも燃料の都合上、支援要請を受けない限り発艦はしないこととなっている。

隊員名と兵科

アレンドロス・シモヘイへ伍長 偵察科

バルボツサ・スパロー軍曹 突撃科

ニコ・ベリック軍曹 支援科

ローマン・ベリック曹長 統合科であり隊長

ユリシーズ海

強襲揚陸艦より出発したMH-60Mは間もなく降下地点へ降りる予定だ。

「これから実戦・・・」

「おいおい・・・実戦じゃないぞ。開拓だよ！開拓！」

「それにしてもピクニック気分じゃないか？」

「俺の退役するタイミング伸びたよ・・・おかげで。」

「とりあえず目標は開拓だ。現地の住民との接触は一応許可されているが、万が一攻撃して来た場合は交戦の許可がおりている。」

「というか・・・何故開拓行動にこの4名しか採用されていないんだ？」

「さあな。」

降下地点へ降りた部隊は送迎へりを見送り、内陸へ進んでいく。

砂浜を抜けると目の前に広がるのは巨大な森であった。

「ここで海水浴したいな……」

と思うアレンドロス伍長。

「警戒しながら進むぞ。偵察情報団の地図が頼りになるが、何が出現するやら……」

森の中を進んでいく一行は人間と思わしき声がした為、身を隠す。

「この声……まさかの日本語だと!？」

トリップ前の世界では全世界共通であり日本語と言われておりました。

「待て待て……この世界で日本語とは。」

「静かにしろ!バルボツサ軍曹、様子を見る。」

「イエツサ!確認出来る範囲ですが、人数は目視及び会話から判断して5名。容姿は中世の平民レベル。武装は2名がロングソードに1名が弓の所持を確認。男性が2名、女性が3名で2名程……人間ではない……だと?」

「人間ではない?」

「人型というよりも架空作品で言えばエルフといったらいいだろう。ちなみに2名の女性は美人だ。」

「見せる!」

「アホか！」

「続けるが、服装と行動からしてなんらかの不確定要素から逃げていると思われる。」

「流石、一流軍用ハッカーだ。」

「関係ないか？」

「馬の声？」

耳が異常に良いアレンドロス伍長は手持ちの双眼鏡を手にして索敵を行うと6匹程の騎士と思わしき影を確認する。

「ここは映画の撮影という事を願いたいね。」

「映画ねえ〜」

「もつとかがんだほうがいいかもな・・・あれは本物の騎士だぞ。」

しかも黒い鎧だ・・・」

猛スピードで走る黒騎士は逃走中の男女を追いかけており、1人の騎士が突撃する。護衛と思わしき男性が女性を草むらの中へ退避させ、ロングソードを構える。しかし、黒騎士のスピードに追い付かず、巨大ランスの串刺しとなってしまう。もう1人の男性はそれに恐れ、女性を置いて逃げようとするも、弓騎兵のボウガンの餌食となり、頭部を貫かれ死亡した。

「一言言わせてもらおう・・・直ちに母艦に連絡だ！」

「見ず知らずの国を早速敵にするんですか!？」

「優先すべき行為は3名の女性を救助する事だ。ニコ軍曹！」

「現在、許可を求めている。」

「各員、銃を構え！」

ニコ軍曹以外の隊員は一斉にSCAR-Lを構える。黒騎士は女性達を引っ張り出し、一カ所へ集めている。隊員は緊張している中、

ニコ軍曹は現状を報告し、指示を仰いでいる。

>> 強襲揚陸艦『ブライアンス』より第7歩兵小隊”バッドチーム”へ、当艦よりブラックホークが発艦した。上層部は現状を把握・攻撃の許可が下りた。救助を優先せよ。<<
「ファイアー！」

一斉に火が吹く・・・音速で飛ぶ弾丸は”あ”という間に6人ぼ黒騎士を貫き戦闘不能へ陥れた。

直ぐに女性のいる方向へ猛ダツシュする隊員は3人の姿を確認すると無事な様子でほっとしていたが、服は破けており、ここでやるつもりだったのだろう・・・

バックパックより3名に衣類を差し出し着替えてもらい、着替えが終わった時点で自己紹介を行った。

「助けて頂いてありがとうございます。私はハイニユ・ギルバード。」

「私の名はラクランシュ・テラでこっちがフェル・ハイドです。見ての通り私と彼女はエルフです。」

「ユリシーズ陸軍第7歩兵小隊所属のローマン・ベリック曹長です。こちらは左よりニコ伍長、アレンドロス伍長、バルボツサ軍曹。」

「ユリシーズ？」

「聞いた事は？」

「初耳よ・・・それに姿からしてこの世界の人は思えないわ。」

「ハハハ！そりゃ失礼！なんせ異世界から来た者ですからね！」

「異世界！？」

「これはまたどういう経緯でこちらの世界に？」

「それが全く不明なんですわ！何か兵器の実験で失敗かと思いまし

「ただだね！」

「それより、なぜあの黒騎士より逃げていたのですか？」

「昨日の事です。私達の住む村が突然、黒騎士団に襲われたのです。」

「

「異国の侵略と言っやつか？」

「恐らく・・・」

とりあえず、3人だけにしてどうするか話しあった。こうなった以上は現地に留まるわけにもいかず、撤収を決定した。3人の女性は緊急保護という形とした。政府も即承認してくれた。

異国との交渉

前回の事件が起こったが、海岸に安全が見られた為、既に3個中隊が上陸し、陣地を構成している。交渉に備えて小さな国家として偽装はしている・・・皆か・・・

「未確認生物体接近！多数だ！」

「戦闘準備！」

「騎兵と思わしき集団あり！一編成につき20人ほど・・・1000名を越えています！」

「ウィリアム上等、他には何が見え?!」

「明らかに戦争をしに来てますね。長剣剣士が約30名、弓兵が60名、それに杖？」

「杖？」

「何に使うんでしょうか？」

「あ・・・杖から光・・・」

「あれは・・・シールド？」

「おおおおおお！魔法だ！魔法だよ！」

「魔法か！それなら仕方ない。」

全ての兵士が配置に付き、攻撃準備を整える。

因みに皆の戦力は・・・

一般兵士 30名

標準武装：FA-MAS G2

狙撃武装：M82A2

支援武装：M249

兵器

M777 155mm榴弾砲×6門(?)

97式対地噴進榴弾×2門

M270×4台

10式戦車×1台

航空支援

UH-60M^{ミニガン}

F-35B(ロケット弾、無誘導爆弾)

緊張する空気・・・その中のこと・・・

一人の司祭と思わしき人が近づいて来る。

軍は警戒しつつ、トリガーを引く寸前・・・ロケット弾は大部隊へと照準を向けている。

「余はザンスカール教神父なり。サンバルディオ帝国の使者として馳せ参じた。」

気になる人物はサンバルディオ帝国とやらの神父であり、使者としてきたもようだ。

「隊長・・・」

「ま、サンバルディオとやらの交渉・・・やってみるか!」

そのまま皆へ護衛ごと招き入れ、偽装議事堂へ案内し、交渉を開始する。中世風という事を見せる為、兵士は全員中世風の衣類を着せ、一部の重武装隊員は城壁に隠れている。兵器類は絶対的の秘密事項である為、更に奥へ隠している。

「フ・・・余を馬鹿にしているのか？こんな木造国家風情！」

「（こつゆつこと俺たちの世界で言ったら国交分裂ものだぞ・・・
そもそも、こいつ神父か！？）」

「我が国の条件を提示する。一回のみ口頭で言う・・・」

- 1、貴国は我が国の属国となり毎月半分以上の食糧をおさめること。
- 2、我が国の精鋭騎士団「ブラックブラッド」団員6名の殺害について謝罪と賠償を払う事。
- 3、殺害した者を我が国へ差し出す。又は、貴国が公開処刑を行ない、首を差し出す。
- 4、貴国の独自開発武器の全てを差し出すこと。又、研究員全員を我が国へ差し出す事。
- 5、貴国の宗教を強制的にザンスカール教へ改宗し、各宗教に属する者を粛清すること。
- 6、貴国の軍を解体する事。
- 7、貴国の独自魔法があれば差し出す事。

以下、外道ともいえる条件がわらわらと出てきており、ユリシーズの方々には人間性を既に疑っていた。

「（自己紹介もせずにこれか・・・こんな文字よめねえよ！ギリシヤ語か！？イスラム！？ドイツ！？英語！？）」

「以上だ・・・このような好条件は他の国ではないぞ？」

「ククク・・・好条件ですと？」

「（あちゃー、怒らせちゃったよ。）」

「（隊長は怒ると暴走するからね。）」

「（去年は市一つ目茶苦茶にして数万人規模で掃除していたなあ）」

先ほどより隊長と出ている人について・・・

本名：岡田豎明

ユリシーズ海軍第10統合小隊所属の少尉。普段は大人しく絶対に
厳しくない隊長であるが、暴走すると総司令官ですら手を出せない
ぐらいに恐ろしい人。ある兵士が言った通り、厚木基地で反軍デモ
を目の前にし、マジギレしてしまい、たまたま補給の為に立ち寄っ
た戦闘ヘリ（AH-64D）で殺しに掛かり、町一つ破壊しつくし
た。幸いにも負傷者は出なかったが市1つ目茶苦茶にしてしまい、
天皇陛下より軽い注意を受けている。今回の偽総理に選ばれた理由
は天皇曰く「面白そうだから。」とのこと・・・

「？」

「お宅ら人間かい？」

「無礼者！神父様の御前であるぞ！つまり神の代理人なり！」

「神ねえ・・・よく考えてみ？人がやる事じゃないよ？」

「属国の平民・貴族は奴隷としてサンバルディオ国内へ永住だつて
？おかしくて笑いそうだよ！」

「貴様！そもそもサンバルディオ国内に勝手に国を作ったのはどち
らだ！！！」

「誰もここはサンバルなんちゃらの領土とは聞いてないね。」

「こやつとの交渉は話にならん！おい、この場で殺せ！」

「待て！ザンスカール教には興味がある。」

「ハ？」

「ザンスカール教について教えてもらおうか？」

1、神は全てである。

「はい、分かった。と言う事で帰れ！」

あまりにも態度が酷過ぎるあまり護衛ともども怒りが爆発寸前であ
った。

「この場で斬り捨てる！指導者がいなければ滅亡する！」

この世界というよりこの大陸に存在する国のほとんどは指導者がいなくなった時点で国が滅亡するという習わしがあった為、便乗したサンバルディオ帝国（他大陸からの侵略国）はこの方法で20か国以上も滅ぼしている。

「交渉決裂だな・・・ヴォルギン伍長！」

名前を言うつとすぐにホルスターより拳銃（M92F）を抜き2名の護衛を射殺した。

「な！一体何をした！？魔法か！？」

瞬く間に起きた事に驚きを隠せない神父・・・額に銃を押しつける。

「死にたくなければ・・・巢へ帰る事だな！」

「この程度でおびえると思うな！」

ひとまず返すが、戦争は明らかであった。高辻少尉は城壁へ移動すると戦闘準備を再び命令し、各兵器の発射体勢を整えさせ、スナイパーへ命令を下した。

「奴を撃て。」

奴・・・神父の事である。これは彼の気分から生まれたものであった。

「Yes, sir・・・」

「神父 side」

あと少しだ・・・どうせこんな弱小国なぞ肅清で十分だ。

隊長が近寄ってきた為、攻撃を命令する。

「あの国を滅ぼせ。異教徒排除せよ！」

これで本国に・・・と思った矢先、背中に強い痛みが走り、大量出血しているのが確認出来る。

「私は・・・どうしたというのだ？この痛み・・・私は何をした・・・とい・・・」

「ユリシーズ国 side」

狙撃に成功し、死亡を確認した高辻少尉。敵の大部隊が戦略もなしに突っ込んでくるのを確認し、命令を下す。

「砲撃開始・・・！」

後方より発射音が聞こえ、目の前の平原で巨大な柱が上がっていた。既に、大量のロケット弾の餌食となった部隊もあり、見ているだけで痛々しい兵士も見られた。スナイパーには隊長と思わしき人物を随時攻撃する命じ、兵士には射撃体勢を整えておくよう命じている。

「逃げ始める兵士も出ているな・・・どうします？」

「ほっとけ。攻めてくる敵さえ排除すれば良い。」

容赦ない155mm砲弾は無慈悲に敵へ降り注ぎ、血の海へと変えていた。

「そろそろか・・・打ち方止め！」

命令した頃には戦場には死体と負傷者のみの全滅という結果になっていた。

新たな問題・・・領空侵犯あり！

サンバルディオ帝国との交渉決裂による宣戦布告・・・軍事面に関しては撃退すればいい話であったが、ほっといたら向こうの人間が酷い目に合う訳で、早期講和への道を探そうと思っていたが、あの国の提案を聞いた瞬間より諦めたorz

天皇陛下と首相の会談で決めたのがサンバルディオを叩き、我が国の領土としてしまう事だ。

早速、陸海空軍のトップを収集し、出動部隊の編成を行なってもらっていた。

択捉レーダー基地

「むーアンノーン接近！距離40000！」

「飛行物体だと？中世の世界でないのか？」

「さあ・・・あ、報告しないと・・・」

「出現方向からしてアラスカ方面か？」

「択捉基地にスクランブルだ！」

防空基地及び航空基地に報告し、警報が鳴り響く。

「F-14編成の”ガーネット”がスクランブル発進します！」

「確認！長官に緊急連絡！出現時間は0700時、旧アラスカ方面より出現と！」

ユリシーズ空軍所属の択捉航空基地より2機のF-14が出撃する。

接敵地点にて・・・

>> 択捉基地へ、目標をリーダーで捕捉・・・<<

>> 対象を目視・・・レシプロ機!??<<

>> どうした? 詳細を報告せよ!<<

>> 対象は国籍不明のレシプロ機・・・前翼型の機体であるが、複葉機と奇妙な形だ。高度は500を保っており、速度は180km・
・<<

>> 全回線をオープンし、退去を勧告しろ。<<

>> 了解。<<

>> アンnoonへ告ぐ、こちらはユリシーズ空軍である。貴機は現在、我が国の領空を飛行中である。国籍と飛行目的を明かさぬ場合は撃墜も辞さない。繰り返す・・・<<

一向に反応していない複葉機に接近を試みる1番機は500mへ降下する。

約10m以内へ接近するも重武装(AIM-54C×6、AIM-9L×2、機関砲675発)な為、きつめだ。

>> ターゲット依然として進路を変更せず。<<

>> パイロットを目視・・・向こうもこちらを確認したもようだ。手を振ってみる・・・<<

>> 振り返ってくるのを確認・・・手でなんとか伝えられるか試みる。<<

貴機ハ・・・現在・・・我が国ノ領空ヲ飛行中デアル・・・飛行目的ヲ明カサヌ場合、撃墜モ止ムナシトス・・・

>> 駄目だ・・・世界共通手話が通じない・・・<<

>> 無線に何か入り込んでいる??<<

>> 聞・・・ますか・・・<<

>> 通信を傍受・・・交信する。<<

>> 私はロクシア王国第6王女フィオナです！突然で申し訳ありませんが助けてもらえませんか？<<

>> (いきなり王女とは・・・) 少々お待ち下さい。<<

>> 分かりました。<<

本部に一連の出来ごとを報告し、保護する事を決定した。前翼型複葉機は択捉航空基地へと誘導され、そこで基地司令と接触する。

「基地司令のワッケイン・ベッケーナ准将です。以後、お見知り置き下さい。」

「ロクシア王国第1王女フィオナ・F・ロシアーヌです。先ほどは助かりました。」

「王女様とは・・・何かあったようですね。無鉄砲に外洋へ飛行するとはぐらいに。」

「はい。実は、我が王国が軍の高官達による謀叛に遭い、私の父と母は公開処刑とされ、姉と妹は囚われの身となっております。現在はロクシア帝国として軍事大国となっており、あまり・・・」

「フム、、、国の奪還をお望みですか？」

「私は決して血の流れる戦争を望んでおりません。王国軍は防衛又はモンスターを退治する為に存在していたものですから。」

「なるほど・・・」

「この国から追い出しても構いません・・・ですが、せめて私の連れであるイヴァだけでも保護してもらえませんか？」

「我が国では追い出すような事は出来ません。基本的にはユリシース国の国籍を取る必要がありますが、他の国の国籍でも永久的に住む事は可能です。ですので天皇陛下にでも会えば簡単ですよ。」

「そんな簡単に・・・」

「行けるんです。」

「司令、東京までのチャーター便の確保が出来ました。ただ・・・ただ・・・」

「確保できたのが電子戦機で、不便をおかけする事には・・・」
「私達は構いませんが？」
「それがですね・・・EA-6で・・・」
「仕方ないか・・・王女様、支度の必要は・・・ありませんね。」

早速、外へ出る。

「物凄い轟音ですね。プロペラ機ではここまで大きくないのですが・・・」

「なんせジェットですからね。」

「ジェット？」

「詳しい話はパイロットから聞いて下さい。貴女方の乗る機体はこちらの格納庫に用意しております。」

「色々と有難うございました。けど・・・このスーツは？」

「パイロットスーツです。装着の仕方は後ほどパイロットより・・・」

「それにしても航空機の文化は凄いですね。先ほどもですが、このような航空機は見た事がありません。プロペラの付いていない航空機なんて・・・デザインも良すぎです。」

「それは光栄です。」

EA-6の格納庫へ行き、乗り込む。

「出来るだけ周辺機器には触らないようお願いします。」

「分かりました。」

「後、王女様は前席、イヴアさんは後部座席に座ってもらいます。」

「はい。」

「では、良い空の旅を。」

パイロットが乗り込み、挨拶を交わし、タキシングを開始する。

「私がパイロットを務める風間真です。腕はそこそこですのであまり期待しないでください。」

「そしてリーダー担当のセシリー・フェアチャイルドよ。」

「申し訳りませんが、お願いします。」

>>「タワー、こちら」パンプキン1、離陸の許可を求む。<<

>>「パンプキン1、離陸を許可する。風は西に3m、札幌上空を經由し、東京ルートへ進入せよ。又、今日は祝日でもあり、各航空会社の航空機が多数飛行している。ニアミスに注意しつつ飛行せよ。」

<<

>>「パンプキン1、ラジャー。」<<

2人の重要人物を乗せたEA-6は轟音を立てながら空へと旅立っていった。

兵器開発会議

3日後、王女は天皇陛下と会談を行っていた。

同じ時刻に国会議事堂ではロクシア帝国の使者が来ており、ユリシイズ国民向けに演説を行っていた。常識では考えられない事ばかりであるが、注目されたのは鎧を着た兵士についてだ。魔術によって人間と変わらない兵士を召喚している事について注目を浴びたが、それは戦争状態になった際に、物量で攻めてきた場合の対処方法についてである。人間で構成された部隊もあるが、軽装歩兵程度がほとんどであり、鎧を着た兵士に頼り切っているようだ。

ロクシア帝国の位置は当初はアラスカの位置にあると思ったがユリシイズ国より東へ2000kmの位置一直線先にあった。

首相は途中で演説の酷さに呆れ、首相官邸にて軍事力の強化を計っていた。この世界に来て新大陸で飛行石に加え様々な新たな物質が発見されて超合金系統で大きな進歩が期待されていた。

ユリシイズ・エレクトロニクス社の要人呼び、様々な人たちを集めて会議を行っていた。

最初のページ

「現在、開発中のFFR-31シルフィードですが、明日にはテスト飛行が可能となります。実証試験で確認が出来次第、早急に600機程の生産に入ります。配備方法としては新たな勢力である、ロクシア帝国からの攻撃を防ぐ為、10機完成次第、各基地へと配備します。」

「しかし、アニメだと対空武装しか搭載出来ないが対策はあるのか

？」

「はい。社独自で研究し、ステルス性を犠牲にしてドロップタンクの位置に2000ポンド級の爆弾を取り付ける事で落ち着いております。原作ではJAMに対抗する機体でしたからね。」

「それにこの巨大航空母艦は本気かね？」

「本気です。我が社独自計画した桐生型原子力空母はアングルド・デッキ式ですが、ニミッツ級をベースに艦を更に巨大化し、艦載機を倍以上の増加に加え、重武装を施した艦です。」

「固定武装にCIWSだけしか書いていないが、何mmクラスの機関砲なのだ？」

「40mm機関砲です。」

「40!？」

「40だと!？ガンシップじゃあるまいし!」

「そんなクラスで装弾数は間に合うのか？」

「十分間に合っております。装弾ベルトに少し手を加え従来型の20mmCIWSより135%の弾薬増加に成功しております。又、装弾数以外は従来型と同等です。命中率についても10%上昇しております。」

「専門武装になるか？」

「はい。他の艦へは従来型を搭載していきます。ややオーバースペックな部分がありましたので。」

「完成までは後どのくらいだ？」

「短くて1週間後に就役し、そのまま太平洋の龍とも言われていた第7艦隊へ配備します。」

「首相!そのまま何て本気ですか？」

「本気だ。各種テストも地上で実証済みだ。」

次のページへ

「VF-25・・・だと!？」

「板野サーカスをリアルで本気でやるのか？」

「はい。ただ、飽くまでも設計段階なので・・・」

「性能やミサイル等に無茶があるのでは？」

「承知しております。しかし、ロクシアの物量には物量で対抗するには最適な機体と判断しました。多数のミサイルで物量を制し、カヴォーク、バトロイドで敵を制す。」

「面白いな。」

「変形機構の再現を期待するよ。」

「ご期待下さい。」

「大和型戦艦・・・また作るのか？」

「はい。今回の大和型には最新鋭の武装並びに必要な人員数の削減に加え、80cm砲を4門搭載します。」

「よ、4門!？」

「はい。新大陸で発見された物質との合金で相当以上な重量に耐え且つ、水の上では沈みもしない成果が見られ、開発を決定しました。船体と砲門の大きさからして単独航行専門の艦として造船します。」

次のページへ

「これは現実に開発できるのか？」

「バトロイドな理解できたが、これは本気か？」

「本気です。これは会長を始めとする全社員が本気です。」

「MS・・・モビルスーツとは・・・ザク?とはな。」

「既にザク?は完成し、極秘に地下施設でテストを行い、高い評価を受けております。」

「本気なら完成が楽しみだな。」

「それとも一つ・・・搭載する母艦についてですが・・・」

「流石に馬鹿でかい母艦は無理だろうな。」

「オーブ級ミサイル巡洋艦に搭載する形で行きたいと思います。」

「専用母艦は作らんのか？」

「予定としてはアークエンジェル級、プトレマイオス級、アルビオン級、ザンジバル級の開発を検討しております。ただ、レーザー系

統の兵器について試験段階であり、当分は・・・数万の新物質で良いのがあればいいんですが・・・」

最後のページへ

「んな！こんな事聞いてないぞ！」

「確かに言いたい事は分かります。そう・・・我が社が極秘開発していた空中空母を5分前に就航させました。」

「まさに軍拡だな・・・どのようにして採用した？」

「極秘ですが、基本的には希望者を集めました。」

「バンシー・・・級・・・一体、どうやって!？」

「遙か南洋にてトリップ前より我が国独自で造船しておりました。」

「原理は!?!?材料は!?!？」

「詳しい資料は手元にある通りです。本来であれば5年先となりましたが、トリップした際にどんな巨体でも簡単に浮かせる事が出来る物質を発見し、わずか1週間で完成しました。」

「この資料以外でも開発中の兵器はあるのか？」

「開発を続けます・・・以上を持ちまして会議を終了とさせていただきます。ここまでのご足労御苦労さまです。」

新たな戦争

「やはり・・・こちらから宣戦布告しますか？」

「元々、あちらさんは宣戦を布告するつもりだったのだろう。」

昨日、ロクシア帝国の演説において、使者と護衛が突如発狂し銃を乱射した。国会議員及び報道関係者8人死亡し、首相を含む4人が負傷した。

現在はユリシーズ国際病院にて国政の管理を行なっている。

「首相、お電話です。」

>>私だ。 <<

>>入院中に申し訳ありません。先程、小笠原基地よりロクシア帝国と思われる大艦隊を確認しました。 <<

>>進行ルートは？ <<

>>恐らくですが、沖縄でしょう。 <<

>>フルボッコにするしかないな・・・第7艦隊を出動させよう。

<<

>>了解。 <<

太平洋の龍と言われた第7艦隊は第2次世界大戦において駆逐艦のみの編成でありながらもアメリカ軍の艦隊の半数以上を無傷で撃滅したといわれ、前世界では太平洋の龍として恐れられていた。

九州の近くを航行していた第7艦隊（戦艦4、巡洋艦8、駆逐艦16、空母4）は連絡を受け取ると進路を変更し、沖縄へ向かう艦隊の撃退へ向かった。

第7艦隊を指揮するのは朝霧一馬

旗艦はアドミラル56型原子力空母「イルビシオン」

「司令、艦載機は使わずでよろしいのですか？」

「相手もなめてかかっているのだ。問題はないし、上層部には許可をとつてある。」

「無人機からの映像データ入りました。」

「駆逐艦30、巡洋艦44、戦艦10、空母8、艦載機はソードファイッシュユ似が300機近くだな。」

「（流石、司令だ。映像データで数えるだけで嫌気さすのに秒読みで理解するとは・・・）」

「全艦、対艦ミサイル発射用意！」

全艦のVLSハッチが開放し、ミサイル発射体勢を整える。

「第1斉射・・・撃て！」

沖縄より12km先

ロクシア海軍旗艦 空母「ラダトーム」

「ユリシーズ軍に期待したものの・・・外れたようだ。ド肝をぬかした人間を期待したのだがな・・・」

「艦長、ユリシーズ艦隊を捕らえました！」

「進路変更！ユリシーズ軍艦隊だ！」

「しかし・・・命令では・・・」

「たかが島の占領ではつまらんだろ？」

「レーダーに多数の高速飛行物体出現！こちらに接近！恐らく・・・航空機かと！」

「対空戦闘用意！我が艦隊伝統の弾幕を張れ！」

「了解！」

だが、多数の飛行物体を目視した時・・・ほとんどのロクシア軍人が目を疑ったであろう。

「航空機じゃない！」

第7艦隊から放たれた50発以上ものミサイルであった。

「あの兵器は・・・!?!」

「とにかく弾幕を張れ！ロクシア仕込みの弾幕だ！」

「は、速い！」

ロクシア軍の対空兵器のメリットは連射力と弾数にあり、歴史上航空機が低空で艦隊に近づく事は無かったという。

人間が扱う機関砲では小さい物体に当たるわけがなく、ミサイルはロクシア艦隊を襲いかかり、僅か30秒以内に空母以外全隻撃沈にという結果になった。

「おい・・・何があつた？」

「空母以外の艦艇全滅です・・・敵は一体何を・・・」

「参謀総長・・・君はどうする？」

「私は退却を命じます。敵を知らずして戦は成り立ちません。」

「戦闘続行！」

「ジブリード司令！第2波が来れば我々は・・・!」

「では、ロクシア帝国の誇りを捨てるとでもいうのか！沈んだ艦に乗っていたのは所詮は魔術で作られたアーマードールだ！」

アーマードール・・・ロクシア帝国の特有の召喚術。人間の意識を持つ重鎧で構成された兵士であるが、銃器の扱いから軍事兵器の扱

いまで非常に優れている。ロクシア軍の90%がアーマードールで占められており、10%人間は指揮官や士官が殆ど。デメリットが指揮をする人間がいないと動けない事である。

「航空機を全機出せ！」

「りよ、了解・・・」

ユリシーズ第7艦隊

「空母以外は全滅・・・司令、何か意図でも？」

「我々の力を示しておきたいからな。ただ、敵の旗艦がどれかは気になるが・・・」

「やはり中心でしょうか？」

「だろうな。」

「CIC艦橋！敵航空機を確認！数は300です！」

「SM-6発射！サルポー！」

全艦艇から発射されたSM-6は数分後に300機全機撃墜と言う戦果を上げ、更に空母も旗艦以外撃沈という戦果も上げた。ロクシア帝国は戦闘継続を断念し、本国へ撤退した。

ロクシア帝国ではこの報告を受け、戸惑っていた。

「我がロクシア帝国で最も名誉を受けた艦隊が旗艦を残し全滅・・・」

「皇帝陛下、やはり物量で行きましょう。奴らは魔術を持っておりませんし、我々程兵器製造能力は高くありません。我々の何と言っても魔術で兵士から兵器まで作れてしまつところが長所でありますから。」

「私の専属アサシンを送り込んだのだろうか？どうなつたのだ？」

「・・・」

「……………」

「……オガサワラ諸島で発見され、射殺されました。成果はユリシーズ大陸の地図のみです……」

「……そうか……ユリシーズ本土上陸作戦を開始する。上陸場所は九十九里浜だ……」

「コミテルン大將軍よ、君にこの作戦を任せる。」

「了解しました。」

「投入兵力は300万だ。増援で700万を待機させる。又、今作戦に超兵器の投入を許可する。好きな兵器を持っていけ。」

「面白い戦いになりそうですね……確実にやってみせます！」

房総半島上陸戦 - 本州に迫る危機、1000万の脅威 -

ユリシーズの防衛の中で最も危険とされるのは全国一斉で行われる全兵器の点検である。何故、この一斉点検を導入されたかは不明であるが、お陰で稼働する兵器は僅か数える程しか無い。しかも、3日間も続き、巨大な穴を開けてしまつ危険な日と国民から見られ、一部地域では独自に自警軍を動かすぐらいである。

房総沖30km 漁船団

「マグロが大漁だぜ！」

「戦時下なのに親方は呑気ですね・・・」

「どうせ敵はここまで来れんよ。」

「でも今日は大穴の日ですよ？」

「敵も気付きはしないさ。」

双眼鏡で前方を見渡す。

「なあ・・・大穴の日に軍事演習はするものなのか？」

「小学校の教科書にすら載るぐらいの日だぞ？・・・する訳・・・」

漁師が見たもの・・・

「あれは旧ドイツ海軍のシャルンホルスト級だろ？」

他の漁船に乗り込んでいる漁師仲間が話し掛ける。

「それにフレッチャー級駆逐艦にレキシントン級空母だぜ。おまけにアイオワ級戦艦にアラス力級大型巡洋艦とアトランタ級軽巡洋艦だ！」

「お前はオタクか！」

「近づいてくるな・・・多数の輸送艦も見えるぞ。」

「今度は歴史マニア向けの兵器でも作つたんじゃないか？」

「待て！軍旗がユリシイズ国の旗じゃないぞ！」

「だとすると・・・ロクシア・・・帝国・・・」

「全船舶へ通達だ！房総沖にて無数のロクシア帝国軍艦艇を確認した。操業中の漁船及び船は直ちに作業を中止し、陸地へ避難せよ！」

この連絡はユリシイズ国籍の全船舶に行き渡り、海での犠牲は出さずに済んだ。

ユリシイズ国の東海岸沿いでは避難警報が鳴り響き、軍が出動していたが、歩兵程度のみで稼働兵器はスクランブル用の航空機のみであった。

鴨川連絡所では軍への連絡を急いでいた。

>>急いでくれ！ロクシア帝国は近くまで来ているんだよ！<<

>>今、急ピッチで進めている！少なくとも20分で房総沖の部隊が動ける！<<

>>長すぎだ！もう双眼鏡で見える距離だ！<<

「所長！ノルマンディー上陸作戦で有名なLCVPだぞ！武装ホバークラフト確認！240cmクラスの砲塔を搭載しているぞ！」

>>とにかく我々は避難を終えたから急いでくれよ！<<

ヒュ~~~~~

「この音は・・・？」

ドーン！と巨大な音が近くで上がり窓ガラスは割れ、そばに大きめの穴が開く。

>>我々はもう避難する！あんたら軍人は急いでくれよ！<<

電話を切ると残った人たちも直ちに避難を開始した。

「俺のフェラーリを使うぞ！」

「2人乗りだろ！？こっちは5人もいるんだぞ！」

「無理やり押し込めばいいんだよ！イタリアは伊達じゃないぜ！」

首相官邸では・・・

「分かっている！先ほど連絡を受けたが、このタイミングとは・・・
少々甘く見ていたようだ。非常事態宣言を発令する！」

蹴り破るかのように官僚が突入してくる。

「首相！東海岸全域に無数の艦艇！目視だけでも相当な数です！既に三宅島等各諸島で交戦も始めてます！」

「チツ・・・！サンバルディオといいロクシアといい！」

「お電話です！」

>>俺だ！<<<

>>ユリシーズ統合司令部の麻生太郎です。先ほど、レーダーを復旧させた所、南からも敵を多数確認しました。<<<

>>それで部隊は？<<<

>>ユリシーズ・エレクトロニクス軍事部門との共同戦線を張っております。艦艇の出港には20分掛かります！<<<

>>20分！？どういう事だ！<<<

>>OSの起動時間があまりにも長すぎが原因です！<<<

>>兎に角、内地の部隊を海岸一帯に集中しろ！航空部隊も発進が出来次第、すぐに飛ばせ！<<<

>>了解です！<<<

>>幸運を祈る！<<<

>>首相こそ！<<<

「先ほど、飛ばしたばかりのスーパーシルフより敵の数が判明しました。」

「何万だ？」

「1000万・・・です！艦艇も航空機の数も半端無く1機だけでは情報パンク状態です！AIも処理がほぼ不可能となっております！」

「ユリシーズ・エレクトロニクスに緊急連絡だ。」

エレクトロニクスにホットラインを繋げる。

>>はい、会長の原光宏です。<<

>>原会長、試作兵器で実戦に出せるのはあるか？<<

>>80%の兵器が実戦に出せます。例の兵器も投入しますか？<<

>>やってくれ。<<

電話を切った後に思った事・・・

恐るべし・・・ロクシア帝国に鎧兵士デュラハン・・・

デュラハン・・・鎧で構成された兵士の呼称。主にユリシーズ軍で使われている。

習志野基地では配備されたばかりのFFR-31シルフィードが次々と出撃していく。横須賀基地並びに館山基地からは艦隊が出港し、攻撃を開始していた。各海岸でも上陸部隊に対し、攻撃を行っていたが、一部海岸で上陸されてしまい、排除に手間取る等の事態が起こっていた。

ユリシーズ・エレクトロニクスでは実戦配備の兵器を直ちに送り出していた。例の兵器も共に・・・

「オーバーキルではあるが、物量ならこうするしかない。」

パイロットは言う。

エレクトロニクス会社奥にて

「私達も何か試作兵器でやらなければ！」

「バンシーは最終段階で実戦は厳しいし、大和型は95%で武装0Sのインストールが終えていない。」

「あの兵器を配備するとしても海岸基地が限界だぞ。ユリシーズ軍はいくら強くても狭すぎてあんな兵器の歩き場所が困るな。」

「だから専用の地下基地を各地に作った。訓練も行え、土地も喰わない。」

「VF-25は何とか5機程出せたが、ミサイル補給にはここへ戻らなければならぬし、まだ変形機構も完全じゃない。」

「兎に角、戦える兵器は出さぞ！いいな？」

三宅島では火山麓の避難所(2km×2km)を中心に激しい180度の銃撃戦が繰り広げられていた。

「まるであの山荘の事件を思い出すよ！」

「赤軍の起こした事件か！確かにな！」

「弾薬は持つか！」

「地下製造ラインのお陰で3ヶ月は何とか持ちます！」

「ユリシーズ陸軍の意地を見せるぞ！桐生一馬に負けぬ気合いで守りきれ！」

三宅島の避難所では陸空に対抗出来る武装と弾薬が豊富にあり、最終防衛ラインとなっている。約400人の陸軍が常に配備されている。

「相手が二次世界大戦レベルの武装で助かったと思っているよ・・・バタバタ倒れてくれるからな。」

「中将、FA-1 ファーンの航空支援が受けられます。」

「来たぜ！敵の位置を割り出せ！最も多いと思われる地点に爆弾を落してもらえ！」

「Yes, sir！」

本州より飛来したFA-1はロクシア軍に機銃掃射、爆撃を加えた事で弱体化が目立つようになっていった。20mmガトリングは密集隊形の敵に十分な威力を示していた。

百里基地ではB-2を次々と飛ばしていた。

「出来るだけ三宅島へ部隊を送れ！それと海岸への巡航ミサイル攻撃も強化だ！」

「エレクトロニクス社所属の航空機より燃料補給の要請が来ております。」

「3番滑走路への着陸を許可だ！」

九十九里

最も上陸部隊が多く更に、間隔も短い為、撃退が難しくなっていた。艦隊の支援を受けているも敵は増え続けており、目途が立たなくなっていた。

「第20支援連隊に砲撃強化の要請を出せ！航空機には引き続き爆撃を強化だ。艦船が来るまでの辛抱だ！」

「エレクトロニクスより新型兵器の投入許可が来ておりますが・・・」

「なんでもいい！使える兵器は投入だ！」
「了解……」

許可を出した途端、海岸に大きな爆発が起こり、上陸部隊が一気に排除された。

後方を見た時、殆どの兵士が絶句した。

「モ、モビルスーツ……だと！」

「噂で聞いたいたが完成したのか！ザク？F型だぞ！」

「我々の技術か……」

ザクの活躍により、次々と蹴散らされていく敵……陸軍も負けずに押し返していった。

「パイロットに感謝しないと……」

月の砂漠方面

上陸部隊は激しさを増していた。ここでは軍と警察が共同戦線を張っていた。警察は微力ながらも抵抗を続けた事で時間稼ぎになり、軍が駆け付けた頃にはまだ、浜辺で敵を抑える事が出来ていた。ここでは山中に配備されている200mmレールガンの支援を受ける事が出来、上陸艇を次々と撃沈していった。又、航空支援ではA-10Cの支援が受ける事が出来、30mmガトリング砲の轟音と爆撃の音が響いていた。

「部長！警視總監に給料アップの懇願忘れないで下さいよ！わしだつて普通の給料で戦っている訳じゃありませんからね！」

「だったら撃退しろ！ゴキブリ並みの生命力が自慢なんだろ！」

「拳銃じゃ指が痛くなるんだよな……」

「警察官！これを使い！」

F A - M A S G 2 を渡される。

「こいつはファマスじゃないか！よしや！」

「こいつめ……」

第7艦隊は現在、宮城沖にて敵を排除しつつ南下していた。横須賀基地を拠点とする第9艦隊は暫くの間、敵艦の攻撃に釘付けされていたが、航空機が本格稼働してからは、動けるようになり三宅島へ針路を取っている。

横田基地から発進した、FFR-31を中心とする第908航空師団は敵艦へのミサイル攻撃にて多大な戦果を上げていた。

房総沖 - 80mm 第9艦隊所属 ユーコン級原子力潜水艦

「艦長、配置につきました。」

「誘導魚雷を1番、2番、3番、4番装填、優先誘導魚雷を5番、6番に装填。」

「装填完了……」

「ファイア！」

放たれた6本の魚雷はそれぞれ別の艦に突き刺さった。弾頭は時限信管であり、数秒後に大爆発を起こし、ロクシア軍艦を真っ二つに折る。

「命中……」

「ピンガー確認……後方より大型推進音確認。」

「音響誘導魚雷を後方1番に装填……ファイア。」

「発射！」

放たれた魚雷はたちまち大きなスクリュー音を立てる大型駆逐艦に命中し、撃沈した。

ユリシイズ軍は上陸する敵を次々と排除して行った。三宅島ではユリシイズ陸軍の活躍に加え、増援の10式戦車多数に多数の航空機による航空支援に加えヘリボーン部隊の増援により完全に逆転した。苦戦気味であった九十九里ではザク？Fの投入により完全に排除され、次から次へと来る増援は第7艦隊が蹴散らしていった。南側では第9艦隊が蹴散らしており、戦局はユリシイズ軍に傾いた。

激戦区でもあった三宅島の阿古地区では日本と違いビル等が立ち並んでおり、排除に手間が掛かっていた。

「ヴェルサ軍曹、東側のビルの搜索を完了しました。潜伏していたデュラハンを5体排除しました。」

「しかし・・・ユリシイズ軍で最も弱い所だな。」

「上に相談しますか？」

「パワードスーツが贅沢としても全兵士のIT化が望ましいな。ゴースト部隊みたくハイテク装備とかな・・・」

とあるビル内

「アレン1等、準備はいいか？少なくとも12体はいるぞ・・・」

「任せて下さい、フォーリー軍曹。」

ドアを蹴り破って突入し、集中砲火を喰らわせ全兵士を排除する。

「キリがないぜ・・・これでは・・・」

「何度目の突入ですかね？」

「さあな・・・せめて敵が分かりやすい方法があればな・・・」

この地区でのデュラハン排除に3時間以上かかってしまい、現場の兵士よりハイテク化が必要な声が次々と上がっていった。

本州ではロクシア軍に上陸はされたものの殆どの兵士を浜辺で上陸を阻止している為、町への侵入は無かった。

この戦いにおいてユリシーズ軍で267人殉職し、民間人含め負傷者は5万を超えた。ロクシア軍ではデュラハン990万の損失、殉職者は10人程である。この戦いにおいてモビルスーツの投入が戦局を大きく傾けたと言われている。九十九里以外でも福島、宮城各海岸にもザク？Fが投入された。

最も被害が大きかった三宅島ではデュラハンが島の各地に散り、ゲリラ活動を始めていた。排除には約1年はかかると予想され、島民は避難を余儀なくされた。

軍部はこの襲撃を受け、毎年恒例の一斉点検を取りやめとし、定期点検という方針で決定した。

ユリシーズ・エレクトロニクスでは会議にて開発中の兵器を急ぎ目にし、モビルスーツの量産に入った。

新たな土地 - 暗雲に差す光 -

沖縄から南へ500km地点 上空60000m
FFR-31MR>普天間基地所属 戦術偵察戦闘団12番機<

「結局、トリップの原因は何だったのでしょうか？」

「さあな・・・同日の警戒飛行担当は俺達だが、トリップ前後共に何も起こらなかったからな。」

「間もなく警戒空域です。」

「さあて・・・お仕事、お仕事・・・」

「中尉・・・真下に大陸を確認！」

「真下だと！？さっきまでは何も無かったはずだ！」

「事実です！HUDに映像出します！」

前部座席HUDに映像データを送信する。

「さっきまでは海だった筈だ・・・」

「報告します。」

首相官邸

「星のカービィWiiはなかなか面白いな！ミストレル交通大臣！」

「ハハハ！そうですな！」

「2人して公務の最中何やってんですか！？」

げんこつ！

「痛い・・・」

「痛いorz」

「公務中でしょう！首相・・・今日こそは許しませんよ！」

「す、すまん！つい出来心で・・・」

「出来・・・心？」

「そ、そう・・・」

「では本日より1ヶ月間首相を監視します！何処へ行こうか見逃し
ませんよ！」

「ちよつと待て！家まで入って来るのではあるまいな！？」

「勿論・・・入りますよ。首相の側で生活を監視するのも秘書の務
めです！」

「まさか・・・風呂までは入って来るなよ！」

「入りますよ？監視ですから・・・」

「いくらなんでもまずいだろ！男女が同じ風呂に入るなんて！」

「監視ですから。襲って来たら容赦しませんので・・・」

ボタン！（ドアが蹴り破られる音）

「首相！大ニュースです！」

「どうした？」

「南約2500km先に新たな島と国を確認しました！」

「ほお・・・戦争沙汰は嫌だな・・・」

「恐らくですが、心配ありません。」

「何故だ？」

「偵察情報によると約30km x 30km程の島ですがやや小さな
文明が確認されております。」

「その文明が国か・・・接触してみよう。」

「部隊を出しますか？」

「いや、使節団を出そう。悪い予感はないから・・・多分、大丈
夫だろう。」

今回、使節団団長として選ばれたのはユリシーズ空軍所属のジョン・
ストーン中佐である。護衛としてユリシーズ軍諜報機関「日本」の

エリート職員2人が同行する。土方美里伍長とロナード・G・クラース曹長で2人とともに護衛としては優秀で高い実績がある。

ユリシーズ海軍所属 アーレイバーク級ミサイル駆逐艦「ジーラン」

「わざわざ護衛艦で行くのですか？」

「仕方ありませんよ。今は戦時下の真つただ中ですし・・・」

「お手柔らかに行くか・・・」

出港した「ジーラン」は道中、ロクシア軍を捕捉する事もされる事もなく順調に事が進み、次の日の朝には島に近づく事に成功した。

「では・・・行ってくる！」

「いい知らせを期待しているからな！」

「期待していて下さい！」

内火艇で海岸へ上陸し、坂を登っていく。

「文明か・・・」

目の前に見えた光景は到底、人間が作るとは思えない建物群にバランスの悪く大砲がむき出しの城が見えていた。

そこに駆けつけてくる人・・・いや、そもそも人か？

「侵入者にしては・・・何者だ？」

この人は警察官と思わしき帽子を被っており、やけに年を取っている・・・

「突然の訪問失礼しました。私はユリシーズ国使節団団長のジョン・

ストーン中佐です。こちらは護衛の土方美里伍長とクラース曹長です。訪問目的は国交を開きたく参りました。」

「使節団ですと・・・失礼、私はプブレッジ所長のボルン署長です。外交の件につきましては・・・今から私が案内いたします。ただ、この大王は外交に関しては貧相な為、期待はしない方がいいです・・・」

そのままプブレッジへ向かうと住んでいる住人の注目的となっていた。恐らく人間という種族を見たことないだろう・・・

「やけに目立ちますな・・・周囲の視線が物凄く気になります。」

「まあ・・・村を見ていると人間なんていなさそうだな。」

「曹長、何となくですけど星のカービィに似ている気がします。」

「すまん、俺はカービィはあまり見てなくてな。」

「俺なら何話か見たこと有るけどな。」

「中佐！？見ていたんですか？」

「ちょっとした興味本位だが・・・確かに似ているどころか瓜二つだな。」

「住民もアニメそっくりで・・・まさかね？」

話し合っているうちに登場人物等からして本物のププランドと断定した。

10分後に城に着き、大王の間でププランドの大王と面会する。

「遙か北に存在する世界からの来客です。」

城を案内してくれたのはワドルドゥだ。

「ほお・・・ようこそ我がププランドへ！」

「歓迎するでゲス！」

「それで、なんの用ゾイ？」

「ええと・・・いきなりですが、我がユリシーズ国との国交を結びたいと思いたく訪問させて頂きました。」

「国交を結ぶ場合は条件があるはずでゲス！その条件は？」

「我が国では国交を結ぶのみが希望であり条件はありません。」

「ププランドとしての条件はありますか？」

「我が国の条件として戦争を必ず起こさないことと戦争が起きた際は命を張って守ることが条件ゾイ！」

「（意外と緩い条件だ。）」

「了解しました。この条件ならお安いご用です。」

「交渉成立でゲスね。」

「ブワハハハハ！」

こうして簡単に国交が結ばれ、同時に安全保障条約も結ばれた。一方的であるが、ワドルデイ達や住民では侵略軍に対抗は出来ないだろう。

バンシー？ 就航

2012年7月26日 ユリシイズ海 群馬より50km先 トリ
ップより56日目 UH歴 0年

ププブランドの出現によりバンシーの造船空域を変更せざるを得ない状況になった。戦術偵察戦闘団の分析により造船空域と3kmしか離れていない事が判明し、急遽移転となった。その為、予定日を大幅に繰り上げ、7月26日に完成することとなった。

既に完成したバンシー？のブリッジでは最終段階に移行していた。

「艦載機の収容が完了しました。FA-1を20機にFFR-31（シルフィード）を100機、FFR-31MRを20機となっております。」

原作のバンシーと違い大幅に改造されており、やや巨大化している。格納庫の変更により大型機5機分の収容スペースに加え艦載機スペースを160機分収容スペースを確保している。標準搭載機数は140機となっている。残り20機分は他部隊との共同作戦時に使用される。主な目的は補給・整備であるが、被弾時の緊急保護や修理にも使われる

武装関連では各種ミサイルを揃えている。対空ミサイルは短中長と揃っておりラムラム及びサイドワインダー仕様、対地ミサイルはトマホーク仕様、対艦ミサイルは93式空対艦誘導弾仕様となっている。どれも威力は倍近くある。又、艦全体に近接防御システムとして40mmCIWSが多数搭載され、手で扱われる20mm防衛型機関砲が240基搭載されている。機関砲の制御は機関砲管制

室にて制御され、240人の機銃手により制御される。

フリーフィンクルームでは各種最新型の機器が搭載されており、立体的映像が実現可能となっており、作戦立案に大きく貢献出来る。又、映像分析による自動地形生成システムも搭載されていることも大きく注目されている。

防衛省の空中空母防御規定により搭載機数は140機となっているが、10機分は護衛機となっており、3時間8交代制となっている。これはパイロットの精神上の理由がある。24時間飛行体制の護衛では1日の燃料消費量が膨大な事になるはずであるが、瀬戸内海より無限の石油（何故無限なのかは不明である）が掘り出されたことにより実現している。

CICに関しては第1CICと第2CICがある。第1CICでは艦のメインシステムの管理を中心に行っており、第2CICでは武装を中心に管理を行っている。

発着艦可能機体は第1世代〜第5世代ほぼ全機が運用可能であり、実際に長期間かけての低空で行われたテストが実証している。

永久運用が前提であり長時間作戦行動を実現する為、生産区を設けている。主にバンシーと艦載機の搭載武装を艦内で生産することが目的であり、天皇陛下のリクエストでもある。各種ミサイル及び爆弾を含めると数千発生産可能な部品が揃っている。

このバンシーの就航以降、ユリシーズは本格的にチート国家という路線に乗り始めた。

当初、艦名を「オーディン」「ジハード」「ジークフリート」「フ

「エアリー」「バハムート」の候補が挙がっていたが、相応しい名前が決まらず、最終的にバンシー？で決着した。

「間もなく首相がブリッジに上がってきます。」
「首相に敬礼！」

乗組員は気付いてないが、このバンシーは首相の欲が起源となり建造された。

因みに乗組員はパイロット含め1200名となっており、緊急避難用のスペースを含めると搭乗可能総人員は4万近くとなっている。

食料については4万単位で考慮すると約6ヶ月分の食料が確保されている。又、厨房の隣部屋に各種野菜が栽培可能であり、栄養面では問題は無かった。肉類に関しては流石に物資として搬入という形になっている。動物までは連れて行けないし、衛生面で問題が生じる可能性があるためだ。

「問題は無いか？」

「はい、出力は安定しております。核融合炉の正常に稼働しており、既に10ノットで航行の準備に入っております。」

「では始めようか。」

入れ忘れてしまったが、バンシー？は前線での活躍も前提とされており、司令部としての機能を揃えている。

「私はユリシイズ国首相の東郷だ。本日、我々は世界で初めて空中空母の運用を開始する。現在、我が国は2つの勢力と交戦状態に入っている。中世レベルのサンバルディオ帝国と近代レベルのロクシア帝国だ。」

演説は10分程度のものであった。

「以上、これをもってバンシー？の就航の許可を出す。艦長……」
「イエッサ！全要員は配置に着け！」

配置につくまで約3分で落ち着いた。

「微速前進……速力240、高度2000」

「速力240、高度2000維持……」

徐々に加速していくバンシー？は欺瞞積乱雲から抜け、その巨体を晒した。

「司令、護衛機の発進を。」

「了解。」

「ユリシーズ空軍第701統合航空団”ユニコーン”出撃させます。」

「アフターデッキよりユニコーン1から5出撃、レフトデッキよりユニコーン6から10が出撃。」

真下にいる漁船団は真上に出現したバンシーに驚くばかりであった。

「あ、ありやなんだ!？」

「でけえ!」

「まるでバンシーのままじゃないか!」

今後、しばらくは人々の驚愕は止まらない状況が続いた。前代未聞所か誰も想像もできない空飛ぶ艦船はユリシーズ国内を少なくとも1ヶ月は騒ぎが続いていた。

バンシー？の特徴の一つ・・・大型レーダーの展開を開始した。強力なレーダーによりステルスすら発見できてしまう性能を持ち、電磁波も殺人に至らないレベルが特徴。

「レーダー展開・・・」

「了解・・・レーダーを展開します！」

「司令！レーダーに反応あり！小笠原諸島に数隻の艦艇を確認！」

「IFFに反応は？」

「ありません。ユリシース国へ針路をとっております！」

「ロクシア国にしては奇妙ではありませんか？」

「確かに・・・両国家ともに戦闘は起きなかったからな・・・サンバルデイオは交渉日以来、動向見られず。ロクシアも1000万攻めを確認して以来動向なし・・・奇妙だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2065y/>

チート国家、異世界へ

2012年1月2日05時47分発行